

虚無主義者はかく語り き

アグナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世は総じて無価値ならば。

なし得る万象に意味は無い。

煌めく才能も、輝く実力も。

所詮は持てる持つ必然に過ぎず、ならば有能と無能の垣根はない。

よって実力主義には意味が無い。

全ては必然に決定される。

泡沫の夢、流れに任せるが人生である。

虚無主義者はかく語る――。

目次

虚無主義者の序説

1

罪人と虚無

19

虚無主義者の序説

『ありうべからざることはないか！

かの老いたる聖者は森の中にあつて、いまだついに耳にしたことがないのである。

——神は死んだ！ と。』

☆

人は平等であるか。

その答えはイエス。

何故なら総じて無意味で無価値で意味が無いから。

と——蓮華れんげ緩夏かんなは青い空を見上げながら独白する。

優れた才能の持ち主と無能な劣等者。

人格者の聖人に、鬼畜な犯罪者。

確かに社会という枠組みで世界を囲ったとき、優劣は存在する。

優れた才は尊ばれ無能は蛇蝎の如く嫌われる。

聖人を人は賛美し、犯罪者を悪と憎悪する。

例え無能が望んで無能になつたわけでもなく。

例え犯罪者が望んで犯罪を犯したわけではないのに。

関係ない、関係ない——示した結果が己の価値であると。

社会は残酷に言い渡す。

天は人の上に人は創らず？

否定。人類が人間だれかの上下だれかを定めるのだ。

それが世界の真理。

持てる者は持てるがままに。

持たぬ者は持たぬがままに。

永劫、その価値は変わらない。

先天的さいのうを得た差で人は不平等を押しつけられる。

だからこそ努力すれば何とやらにも意味は無い。

だつて考えてみるがいい。

明日に実るかも分らない花を期待して地道に水をあげることが出来るか？

結実するか分からぬ結果を目指して自傷じりやくを続けることが出来るか？

人間は弱い、心も、身体も、何もかもが。

すぐに安きに流されるし、痛い思いだつてしたくない。

故に、成功するため努力する——当たり前前の正論さえ、忌避に値するのだ。ならば努力できるというのはもう一種の才能である。

叶うかどうかの夢に懸けられるならば、そいつは立派な天才だ。マソヒスト

やはり得てして先天的さいのう。

重ねて言おう、出来る奴は出来るのだ。

何故なら初めから持つてるから。

痛みに耐えうる心と、痛みに耐えうる身体。

だったら努力できて当たり前、そして努力したのだから人並み以上で当たり前だ。

ああ、だから……人間の持つ全ての価値は総じて無意味である。

何故なら初めからそうなると決まっているのだから。

弱肉強食？ 競争社会？ ——馬鹿馬鹿しい。

人の目ばかり気にするから、本質を見えないのだ。

誰かの意見で容易く自らを失うから真理に気づかないのだ。

因果法則——全ては初めに決められ、その通りに終わるのだと。

賞賛も、名誉も、賛美も、尊ぶべき輝きも。

そう決まられた上で、そうなるならば一周回って滑稽だ。

無価値を至上と仰ぎ見る事ほど馬鹿らしいことはないだろう。故に人は平等である。

平等にも皆全て、無価値であるのだから。

「——と、意味ない独白に時間を消費するのだからいつそ無意味だわな人間は」
「は？　また変なこと言つて、キモ」

黄昏れる初夏の午後この頃。

最後に呟く自嘲の感傷を木つ端微塵に砕くは罵倒。

声音からも強きと分かる女子の声が容赦なく俺に突き刺さる。

「手厳しい。思春期の男子の心は硝子だと何時だか言つた気がするんだけどな」

「知らないわよ、勝手に傷つけばサボリ魔」

「無意味な傷つけ合ひはそれこそ何も生まないと思うんだけどな万引き常習犯」

寝心地の悪いコンクリートを背にしたまま俺は罵倒に罵倒を返す。

態々、目を向けるまでもない。

絶賛午後の授業中にも関わらず、屋上に赴く女生徒など俺は一人しか知らない。

「——今日もいつも通り、刺々しいな神室」

「——今日もいつも通り、鬱陶しいわね蓮華」

中学三年の夏休み前最後の授業中。

俺と彼女はこうして、いつも通り堂々とサボるのであった。

「で？ 今日もまた時間つぶしか。お前は実は俺のことが好きなのか？」

「は？ きも、そんなわけないでしょ。アンタのそのウザイ性格知ったらルックス好きだろうと誰だつて嫌うわよ」

「ああ、ルックスは好みなのか」

「顔が良い男が嫌いな女子なんて、偽善者がゲテモノ好きよ」

「イケメンは正義か。ま、それは男子もこっち変わらないか」

芸術品に破格の値段が付くように。

美しいものはただそれだけで人々を魅了し、絶大な価値を生み出す。

人間、顔だけじゃない人はいうが、だからといって価値は変わらない。

イケメンは黄色い悲鳴を、美人は淡い劣情を。

それぞれ集めるのは必然であつて、偶然じゃない。

「イケメン、美少女はモテて当然。尤も、無条件にモテるのは他に失点を持たない場合に限るだろうが」

「……何？」

「いや、モテるモテないも性格次第だなという話」

「それ、私への当てつけなわけ？」

「いいや仕返し。俺がウザイならお前は差し詰め、怖いかな？」

言つて、俺はそこで初めて上半身を起こし、神室へと目を向ける。

腕を組みながらこちらを見下ろしてくる神室は容姿だけなら美人だ。

既にくつきりとした女性らしい女体像。

美少女というより美人寄りのクールな立ち振る舞いは黙つていればモデルのようだ。

ただそれら美しさ以上に瞳に宿る強気な眼光、攻撃的な口調が他人を萎縮させる。

これでまだ人好きする性格か、周囲を纏める甲斐性を持つていればクラスの中心人物になるのだろうか、生憎と彼女の気性は自分と同じ一匹狼。

つまり、偽悪者染みた口調が災いしてクラスからハブられたのが俺ならば、美人は怒ると怖いを体現した結果、クラスから遠巻きにされたのが、彼女というわけだ。

「うざい」

「今更言われるまでもない。お前が物好きなのだ」

「……はあ」

短い罵倒に肩を竦める。

好意を抱いているわけでもなく、好感度は下の下。

それで尚、絡んでくるのだから自業自得だ。

それきり会話が途絶える。

二人して総じてどうでも良くなるような青く広い空をぼんやりと眺めながら。

不意に、傍らの少女がプシュツと持ち込んだらしい缶を空ける。

「おい、此処でアルコールを飲むな。俺も共犯にされるだろうが」

「今更、傾く評価でもないでしょサボリ魔。罪状が追加されるだけで」

「犯罪と校則違反は雲泥の差だろうが」

「同じ社会悪に差も何も無いんですよ」

「いつかの戯れ言を鵜呑みにするな」

「アンタが抜かすいつもの戯れ言よ」

そう言つて堂々と未成年飲酒する不良女。

通常、これ見よがしの未成年が酒を入手する方法など親を代理に立てるか、親ないし親類縁者の酒蔵からパクるかしか原則方法はないが、神室の場合、やつてる事が違法ならばやるまでの経緯も違法である。

愚かしくも神室は酒を飲むだけに飽き足らず飲むために万引きまでやらかしているのだ。

問答無用に犯罪者、万引き常習犯の鏡である。

「気に食わないなら通報すれば？」

「そして俺も巻き込んでお縄になれと。生憎、ご都合主義の公僕は嫌いだね」

「そ、なら問題ないでしょ」

「身勝手な」

「お互い様」

意味の無いやり取りをしながら俺たちは中身の無い会話を続ける。

「そういえばお前、こんな所に居て良いのか？ お前は不良だが、真面目な不良だろ。進路控えたこの時期に此処に上がってくるなんて正直想定外だ。何かあったのか？」

「別に。ただウザイアンタ以上に他がウザくなっただけ」

「……教師に何か言われたのか」

「……………」

「話さないなら別に良いけど、誰かの意見に振り回されることほど不毛な事は無いぞ」

「……五月蠅い、世捨て人のアンタには関係ないでしょ」

「関係ないが、仮にも数少ない友人だ。世話を焼く気まぐれだつてある」

他人から見れば理論仕立てのウザイ奴、語彙力に乏しい連中からは中二病だのと揶揄されるこの性格だ。

目の前の少女のようにウザイと真つ向から言える人間は例外として、大抵はその普通からかけ離れた性格を前にして忌避する。

実際、クラスメイトは数あれど、俺に直接口を聞く人間など片手で足りるほど。

この年頃特有の、いわゆる皆と同じノリを歯牙にかけない俺だ。

和を乱す異分子として俺はクラスメイトは愚か、同世代からも浮いている。

ハブられることに苦痛を感じるほど、俺は社会に適合しては居ないが、一人寂しく時間を消費するというのは苦痛とは言わずとも億劫だ。

だからこそ、例えば暇つぶしであろうが話しかけてくれる人間は稀少なのだ。

だったら今後も関係が続いていくため多少の労働をするぐらいは何の問題も無い。

「で？ 何を言われた？ もう少し皆と仲良くしましよんていうありがたい言葉でも贈られたか？」

教師のテンプレートを皮肉に揶揄しながら俺はくつと笑う。

しかし返ってくると思つた罵倒か、呆れの声は……。

「夢」

「はっ」

「神室さんには何か夢や目標はないのか、だつてさ。下らない」

「……あー」

ギリツと歯がみするように苛立つ神室に俺は間の抜けた声をあげる。

なるほど、夢、夢と来たか。

そりゃあこの少女が不機嫌になるというものだ。

俺は神室のプライベートを知らない。

時たま、こうして屋上でサボる中だが、それも互いが互いに一線を踏み入らないからこそ。

全てが無価値と断ずる俺は気まぐれにサボり、彼女は彼女で嫌気が差したからサボる。

偶然、サボり先が同じだから時間つぶしに言葉を交わす。

それが彼女と俺との関係であり、ならばそれ以上は必要ない。

だが、少なくとも時間を共に過ごし、言葉を交わせれば見えてくることだつてある。

例えば互いの性格とか性質。

何が好きで嫌いか、何が我慢できなくて何が怖いかな。

そういった内面が何となく察せられる。

そして俺の勘から言えば彼女は誰かに必要とされたい人間だ。

人間関係を厭いながらも切り捨てられない。

好き嫌いを気にしない癖に人の目は気になる。

善行、悪行に限らず、己は今の己じゃない誰かになりたい。

まあ言ってしまうえば思春期特有のツンデレのようなもの。

嫌も嫌も好きよの内とは古い言い回しだが、彼女の場合は嫌なことは嫌だが、それでも自分に絡んでくれる人間や必要にしてくれる人間がいないと自己肯定が出来ない……好みと必要が噛み合わない人間。

その内歳を得れば己の性根に妥協を許し、苦痛のまま人に使われるようになるのだろうが……。

未熟な彼女にそんな諦めや妥協は出来ない。

だからこそ求められた所に反問する。

他人は夢を持っている。誰もが持っていると言っている。

だから自分も夢を持たなければならぬなど。

どうでも良いと心の底から思っているのに夢を求めざるを得ない。

大方、そんな所だろうか。

「別に夢なんて要らないじゃ無いかと言ったらキレルかな」

「もう言ってるでしょ、それ」

「確かに。ついでに言う結論としては俺にはさっぱり理解できない」

心なしか力ない罵倒に俺はさっぱりと言葉を返す。

「夢、目標……悲しいかな、人は無意味なことに理由を求める、動力源を求める。例えば現段階で神室は就職して、企業に社会に貢献したいと思うか？ それを働く理由に出来

るか？」

「出来るわけないでしょ。結局、内実は働かなければ生きていけないからっていう妥協。少しでも良い会社に入って、良い給料を貰う。少なくとも私は社会貢献とか興味ないから」

「ああ、そう。人間楽な方が生きやすい。多くを求めない生活ならば何となく就職して何となく人生平穩に過ごせれば十分だろう。が、それは個人の話でね、社会や企業はより成長したいという願望がある。だから日銭を稼ぐだけの凡夫よりも確固とした目標や夢という名の無意味な進路を持っている向上心溢れる若者の方が魅力的に映るのさ。会社の利益に貢献する働き蜂としてね」

前提として、企業、国家、社会は生きていくために利益がいる。

どんぐりの背比べも良いところだが、仮にも己と他者で競い合うのが世の定め。

生き残るために、選りすぐれた成果を残したい。

それは今を生ける組織全てに共通する話だ。

「さて——そんな利益が欲しい、進化が欲しい、向上が欲しい企業が求める人材として次のうちどちらが魅力的に映るでしょうか。A、金だけ欲しい適度な加減で働く労働人。B、勝手に夢や目標を持って、そこに辿り着くために態々自ら苦勞を背負ってくれる有り難い働き者。神室真澄ちゃん、答えをどーぞ」

「ちゃん付けとかキモ……後者でしょ。今更」

「ああ、その通り。問答無用で後者だ。少し考えれば誰にだって分かる道理で当たり前。言う通り今更な話だ。だからこそ、続く今更は俺の口から言う必要があるか？」

「……だから向上心を持ったため、今のうちから夢や目標を決めてそこへ走っていくための訓練をしろ」

「いぐざくとりー、社畜の第一歩は夢を持つところから始まるのさ」

例えそれが必要に迫られて用意することになった無価値であっても。

他者に使う言い訳は必要なのだ。

「アパレル系に行きたいから専門学校へ、パソコン弄りが好きだから情報系の大学へと、進むレールが山ほどあるからレールをある程度限るために、また向上心の動力にするために夢や目標は必要なんだよっと」

下らない道理を言いながら俺は両手の力と全身のバネを使って跳ね起きる。

これでも昔から色々習い事を嗜んできた身。体操競技もお手の物だ。

立ち上がった俺はズボンの誇りを払いつつ続ける。

「神室はウザイと思うんだろうが適当な虚飾ゆゆぐらいでつち上げておけよ。女子らしくパティシエになりたいとか良いんじゃないのか」

「……何でパティシエ？」

「その不機嫌面、案外職人色が似合ってるんじゃないの？ ビジュア的に」
「死ね」

ツツコミに容赦が無い。

どうやら調子は戻ったらしい。

そう、自分が何を求めるのか、何になれるのか、何を目指せるのか。

見えない未来を模索して、自分の内面と顔を合わせるのは疲れる。

何せ、本質的には自分は何者かという問いだ。

使命がはなつからハッキリしているポジティブシンキングならばともかく、凡人がそんなことを考えろと言われれば惑い、迷って暗中模索に陥るのが目に見えている。

大願成就——などと凡人はそんな難しいことを考えて生きるように出来ていない。

だから目下、一番自分にじっくりくる方法で。

例えば、神室ならば適当な方便を考えるという形に。

楽に考えられるところまで落とし込む。

人並みで在れ、というのが彼女の呪いだというならば他者も差して大きく考えていないと落とし込めば安心するだろう。

「我ながら、最悪な手腕だな」

「何か言った？」

「何でも無い。で、何か適当な夢は設定でそうか？ 何も思い浮かばないなら適当にもっと勉強したいからとでもいって学歴を詰むのもありだと思うぞ。実際、夢以上に効力を発揮するからな。学歴」

「散々、夢が必要とか御託並べて、言うこと学歴？」

「夢が必要なのはスタートラインに立つてから。スタートラインに立つたためには目に見えた結果が必要だろ。学生の能力を測る上で、学歴以上に普遍的に有効なモノはないと思っぜ？」

能力を測る上でテストだ大会だと勿論あるだろうが、大半の生徒がそういった舞台に立つ機会はないはずだ。強制されるがまま、勉強に励むのが大半だろうから。

だったらその一番の武器、勉強量を量る上でテストと同じぐらい有効なのは何か。

答えは学歴。

数が限られる名門であれば、あるだけそいつは競争力に長けていることが明確に分かる。

「勉強だけが俺の全て能力じゃないとは言いがな。別に企業はお前のオンリーワン欲しさに学生を欲するわけじゃない。使ってみないと分からない天才より、ある程度、事前に把握できる能力者を採用するのはリスク管理的に当然だろ」

「最近気づいたんだけど、アンタと話すといっそ人間が煩わしくなる」

「さよけ、なら悪影響を与える悪い友人とは縁を切った方が良策だぜ」

「……失せろ、とでも言いたいわけ？」

「深読みするなよ。単に俺の老婆心」

思いやりの言葉はどうやら別の意味で受け取られたらしい。

不快げに歪められた眉に、キリリとした目がこの上なく恐ろしい。

無自覚ながらも突き放したような言い分に思うところがあつたようだ。

俺としては縁が切れても実際問題ないが……。

「稀少な暇つぶしの相手で、付き合ってもそこそこ。神室から縁切るっていうなら是非もないが、俺としては少し寂しいと感じるところだな。出来れば、卒業までは暇つぶしに付き合ってくれ」

「……あつそ」

素っ気ない言葉だが、表情は怒りから不機嫌に戻っている。

「どうやらご満足戴ける解答を返せたみたいだ。」

「……」

「……」

それつきり、再び話が途絶える。

と——それを狙い澄ましたかのように遠く、鐘の音が聞こえる。

「つと、どうやらホームルームの時間だ」

五、六時間ぶち抜きでサボってしまったがせめて最後は顔を出さねばなるまい。

またお小言を言われるのだろうが、もういつものことと教師も諦めているだろうからそんなに時間を取られることはあるまい。それにコレで成績優秀者、能力があるならばある程度の問題人格も許容される。

「じゃ、互いに教室に戻るとするか。先に行くか、神室？ どうせ体調が悪いとか言つて保健室にでもいる設定なんだろう。俺と同時に رفتらアレだしな」

「言われなくても先に行く。アンタと一緒にとか変な目で見られるし、余計な噂話をされるし」

「了解しましたお嬢様」

やや面倒くさい性分の友人の我が儘をいつも通り受け入れ、俺は適当な時間を稼ぐためにもう一度、空へと視線を切ろうとして——視界の端にこちらに飛んでくるモノを見つけた。

「危な……つて何だよコレ」

飛んできたのは幾つかのプリントが挟まったファイル。

ざっと見れば何処かの高校の入学案内のようだが……。

俺はこれを投げつけた本人、神室に視線と言葉で問う。

「進路希望を聞かれたときに教師に渡された、アンタ分も、対象だそうよ」

「ああ、何だ。お前雑談じゃ無くてコレを渡すために来たのか。律儀な」

「後で文句言われるのが嫌だっただけ。保健室で一人居るのも暇だったし」

「そうかい、じゃ、神室の好意に感謝を送らせて戴きますよつと」

「キモ」

ひらひらと手を振り、笑顔で感謝を述べれば返ってくるのは冷たい罵倒。

先ほどの夢云々で苛立っていた彼女は何だったのかという平常運転である。

「ま、いつも通りなのは良いことだ」

肩を竦めつつ、俺はふと——神室に渡されたファイルに目を落とす。

入学案内が挟まれた飾り気のファイル。

ファイル越しに透けて見える案内の表紙には、

『高度育成高等学校』、ね」

曰く、就職進学率100%を謳い文句にする名門国立校。

俺の性格を考慮すればとても教師陣が薦めるとは思えない学校案内のチラシだ。

「……ま、これも義理かな」

学校自体に魅力も興味も湧かないが。薦めた理由には興味がある。

俺は好奇心の赴くまま、学校案内のプリントを手を取った——。

— 罪人と虚無

『かつては、神を冒瀆することが最大の冒瀆だった。

しかし、神は死んだ。

そして神と共にそれら冒瀆者も死んだのだ』

☆

その日は、茹だるような暑さだった。

毎年の様に聞く夏の猛暑日和。

テレビで見たニュースでは気温は全国で三十度を超えるとか。

街の一つは見かける有り触れたデパートには暑さに耐えかね、室内で時間を潰そうと訪れた人、今晚の夕食を求めに買い物に訪れた人、連れだつて遊ぼうと訪れた男女、或いは男性と男性、女性と女性のグループ、ペア。

笑顔の人も居れば無表情の人も居た。

不機嫌そうな人も居れば、無気力そうな人も居た。

千差万別、老若男女。

デパートで展開されるのは極々有り触れた喧噪だ。

だから……大丈夫。大丈夫なんだと。

私、一ノ瀬帆波は何度目かの暗示を繰り返す。

今年で最後の夏、中学校三年生を迎えた私の身なりは周りの喧噪に対しても浮くことのない普通の身なりだ。

制服に身を纏い、肩には大きめの学生鞆。

放課後をデパートで遊ぶ学生……傍目にはそうしか映らない。

「……大丈夫」

思わず暗示が口から溢れる。

ハツとして私は普通を装いながら視線を動かす。

……私を訝しむ視線も、疑う視線もない。

そもそも人混みに紛れる私に目を向ける者など居なかった。

独り言。そう、独り言だ。

仮に聞かれていたとしてもそうとしか認識されないはずだ。

でも、それでも……理性的な判断とは逆に呼吸が浅くなる。

心臓の鼓動が痛いほど早い。

手足には微かに痺れが奔り、猛暑に反して悪寒が身体を襲う。

——やっぱり止めよう。悪いことはしてはいけない——

「……………ッ」

鞆を握る手に力が入る。

良心が私の覚悟を弾劾するように訴える。

止めよう、怖い、嫌だ、怖い、ダメだ、怖い、怖い、怖い……。

今にも挫けてしまいそう。

培ってきた十数年の常識がこれでもかと拒否反応を訴える。

同時に脳裏を過るは悲痛な叫び。

誰が悪いわけでも無し、強いて言うなら間が悪かったのだ。

『なんでよッ……!!』

ヒステリックに、目尻に涙を浮かべた妹の顔。

『ごめんね……ごめんなさいね……』

言葉荒げる妹に、ひたすら頭を下げる母親の顔。

——私の家は母子家庭だ。

母親一人、姉妹二人。

まだ成人もしていない二人の子供を母親一人で育てるには相当の苦勞がある。

お金は決して多くないし、対して我慢は多く強いられる。

心も体も育ち盛りの私と妹。

不満は口にしなくてもいっぱいあつたし、本当は欲しいものだっていっぱいあつた。それでも……疲勞困憊で日々の生活と私たちの成長を支える母の背を見れば、そんな感情なんて見せられないし、見せようとも思わない。

だって、私たち以上にお母さんは苦勞しているんだから。

本当はやりたいたいことだっていっぱいあつたはずだ。

辛いことも苦しいこともたくさん、たくさん、あつただろうに。

それでも……それなのに私たちの幸せを第一にしていた。

高校へ行くには多額のお金が消費される、だから就職するといった私をお母さんは反対した。

『うちのことは考えなくて良い、せめて学業だけはやりたいたうにやられたい』と私たちの未来をお母さんは取つた。

その思いやりには感謝の念しか出てこない。

頑張っている母親を支えたい——。

私はその一念でひたすらに頑張つた、極力お金の掛からない高校、特待生制度による

金額軽減……必死だった、ただ必死だった。

お母さんの負担を少しでも減らしたい、そう努力していると気づけば学校で一番だつて言われるまでに成長していた。

嬉しかったし、誇らしかった。

努力が報われるのも、これで少しはお母さんの負担を減らせることも、何よりお母さんの苦勞に見合う、自分に成れた気がしたから。

だけど——。

近く、妹の誕生日が訪れる。

私と同じく母親思いの優しい妹。

いっぱい我慢してきた私より二つ下の妹。

私はお姉ちゃんだから。

お母さんと同じくらい、妹の事だつて思つてた。

お母さんもまた、私と同じように妹の事を思つてた。

苦勞は皆一緒、思つてたのも、皆一緒。

だからこそ——間が悪かった以上に『事件』を形容する言葉はない。

その日、ずっと我慢し続けてきた妹に初めて欲しいものが出来た。

今まで確固と我慢し、甘えることも強請ることもしなかつた妹が口に出すほどに欲し

かったもの、その年に流行したヘアクリップ。

妹が大好きな芸能人が身につけていたというそれ。

初めて妹は母親に強請った——誕生日プレゼントに、アレが欲しいと。

当然、お母さんは頑張った。

ヘアクリップを買ってあげるために、妹の我が儘を叶えるために。

けれど、今も頑張っているのに、もっと頑張ってしまったから。

心は折れずとも、身体の方が先に限界をあげてしまった。

母親の入院。

誕生日プレゼントどころでは無くなってしまった。

『欲しかったのにッ!!』

——あんなに泣き叫ぶ妹の姿なんて見たことが無かった。

『楽しみにしていたのにッ!!』

——あんなに憤り、悲しむ妹の姿なんて見たことが無かった。

我慢強くて思いやりがあつて優しい妹が。

お母さんに向けて罵詈雑言を叫ぶ姿など、想像もしなかった。

私はお姉ちゃんだから。

何とかしてなきやと思つてしまった。

妹の笑顔を、私が……そう考えたときに、悪魔が囁いた。
妹を喜ばせるたつた一つの方法。

妹の願いを叶えるたつた一つの方法。

高額ゆえに手が出せないへアクリップ。

買うことの出来ない妹が初めて願った欲しいもの。

それを手に入れるための……最悪の方法。

——盗ってしまおう。

……万引きが犯罪である事なんて言われるまでも無く分かっている。

犯罪が駄目なことも、やってはいはいけないことも重々承知。

でも理性と常識がそう唱えるたびに私の心の闇が囁く。

悪魔のような甘言で私を誑かす。

——私^{あなたたち}たちはこんなに苦労してきたでしょう。

我慢して、我慢して、我慢して我慢して我慢して……。

——妹のため、一度ぐらい悪いことしたっていいじゃない。

たくさん、たくさん我慢したんだ。

たくさん、たくさん耐えてたんだ。

——どうせ、世の中。悪い人なんていっぱい居るよ。

ニュースでは度々、軽いものから重いもの、多くの犯罪行為が取り上げられし、犯罪者を捕まえる番組だつてあんなにいっぱいだ。

それだけ犯罪者は溢れかえっている。

犯罪に限らず公序良俗に反する悪いことを皆一度はやっている。

信号無視、無断投棄、悪口に、嘘と他色々。

だから——赦される。

それは何て甘く間違つた解釈。

自身の不幸を理由に犯罪行為を正当化すること何て出来ないのに。

馬鹿で、愚かで、やつちやいけない。

なのに、ああ、私は今——デパートデパートにいる。

自分の今までを台無しにするだろうに。

思いやつてくれた家族に泥を塗る行為だろうに。

そんな良識リセイが責めるたびに……。

……精神アクマが甘言で覆い隠す。

——別に誰が泣くわけでもない。

商品は多く並んでいる、一つぐらい貰つても迷惑にならないだろう。

「う……」

気持ちが悪くて気持ちが良い。

心は混沌としていて訳が分からない。

視界の全てが霞んで見える、常識が暗闇に隠れていく。

……ああ、これが『闇』か。

他人事のように動く思考。

それでもやるべきことだけはハッキリしていた。

カメラの位置、大丈夫、大丈夫、ここからなら見えない。人の目は外れている、素早く盗つて鞆に隠そう、怪しまれてないか、見られていないか、他に見逃していることは、バレそうなのは、大丈夫、大丈夫、大丈夫、今なら盗れる。

盗った後はどうしようか。一階のあの入り口なら万引き用のセンサーはないからあそこから出ればバレないはずだ。万引きGメンという人にも普通を装っていれば、大丈夫、挙動不審になるな、自然な行動を心がけるんだ。

「……………ごめんなさい」

何を口走ったのだろうか。

無意識の言葉に気づかないまま、私は手を伸ばして……。

「——君、初犯だろ。止めとけよ、向いてないぜ万引きそれ」

パシッと呆気なく横から伸びてきた手に直前で捕まった。

「ツツ……………!!!」

悲鳴が口から出なかったのは我がことながら奇跡だった。

全身は硬直し、心臓が飛び出る程に鼓動を奏でる。

思考は真つ白になり、表情は見るまでも無く真つ青。

端的に言つて、最悪だった。

私自身も、私のやろうとしたことも、私の今、この瞬間も。

それでも、目だけは素早く相手に向いて……。

「万引き一つでそんなに罪悪感を感じる性根だ。多分、人が良いどうしようもない善人なんだろう。だからこそ止めとけよ、一生の傷になるぞ」

相手を慮つた言葉——それに反して声は何処までも無気力だった。

偶々、見つけたから止めた……声にはそれ以上の意思を感じない。

犯罪に対する憤りも義憤も嫌悪も軽蔑もない。

止めた方が良いという言葉は強制ですら無かった。

「わ、……………わたし、は……………」

「うん……………? つておい、ちよつとま——」

目が悪いわけでもないのに、視界にはぼやけきつっている。

やや驚いた声を最後に私は相手の顔を認識よりも早く暗転した——。

「ふむ……」

まずは——客観的に己を顧みようと、蓮華緩夏は思考する。

ある夏の日の放課後。

いつも通りに学校へ行き、学校をサボった俺は炎天の下、屋上で寝そべっていた代償にとても喉が渴いていた。

残念なことに買い食い禁止の中学校に自販機なんてあるわけもなし、かといって温い水道水で喉を潤すには、俺は冷たさに餓え過ぎていた。

仕方が無いから俺は教室でバックを回収し、いつもの担任教師からのお説教を聞き届けた後、デパートのフードコートにある備え付けの給水器を求めて近場のデパートを訪れたのだ。

冷え切った冷水により一息吐いた俺はせっかくだからとデパートにある書店を冷やかしたり、低価格の服屋を眺めてみたりしつつ、デパートを目的も無く散策していたのだが、そこでふと一人の少女が目についた。

挙動不審、というわけでもない。

変わっている、というわけでもない。

ただ単に何処か昏く淀んだ瞳が知り合いの少女に似ていただけ。

容姿が似ていたわけでも立ち振る舞いが似ていたわけでも、まして知り合いだったわけでもないのに、言うなれば気分で、気づけば俺はその少女の後を追っていた。

隣の席になったクラスメイトに「あれ、蓮華どこ?」「サボりだろ」と言われるほどに存在感の薄い俺である。

見れば時折、周囲を注意深く見る少女にすら俺は気づかれなかった。

果たしてストーカーまがいの行動がバレなかったのを僥倖と捉えるべきか、それとも注意深く周囲を見ていた少女にさえ気づかれぬ己の空気の無さに絶望するべきか、なんてどうでもいい思考を張り巡らせていると、少女はある女子向けの店に踏み入り、ある品を見つけた瞬間に手を伸ばしていた。

……商品を手に取る。商品を買うに向かう。

考えれば、選択肢はごまんとあったことだろう。

もしかしたら颯爽と出て行った挙げ句、不審者として逆に己が追われるかも。

それでも……無関係の少女を止めに出たのは正義感では無かった。

関心があった、知り合いの少女と同じ行為をしようとする少女に。

興味があつた、果たしてどんな曲者なのか。

手を伸ばした時に一瞬、躊躇ったことから少女の内心は察せられる。

罪悪感を覚えているのだろう。

犯罪行為を日常茶飯事とする知り合いとはその時点で雲泥の差である。

不正のトライアングルという理論がある。これはアメリカの犯罪学者ドナルド・レイ・クレツシーが多くの犯罪者たちとの接触の果てに導き出した理論で、彼は人間組織内の人間が不正行為を犯す原因を三要因に絞った。

一つは機会、一つは動機、一つは正当化。

……俺は色々な人間を見てきたが、そういえば善良な悪人とは会ったことが無い。故に善良な人間が何かをやらかす際は大抵これに該当すると考えている。

だからこそ興味を覚えた。善良なる人間であるはずの彼女が犯罪行為に奔るほど切羽詰まった背景とやらに。

そんなちよつとした気まぐれ、だったのだが。

しかし、いざ絡んでみればこの通り。

「……気絶してるし」

倒れそうになった少女を肩で支えつつ、嘆息する。

近くで寄って見れば案外、可愛い顔してるな。

……などと思考放棄。

「無理を飲み込むタイプの善人だったか……」

やはり面倒ごとに関わっていくなど愚かな行為だ。

藪を突いて飛び出したのは人畜無害な兎さん。

友達か、家族か、どちらにしても誰かのためにやらかす類いの人間だろうと推測できる。

倒れる程のストレスを抱えたまま、犯罪行為に手を染めようとするものなど相当な覚悟がなければ実行できないだろうから。

恐怖からでは此処まで思い詰めることはないだろうから。

「やつちまつたな、めんどくせー」

良識ある人間に正義を語る言葉もなければ説教する気も無い。

そもそも俺は罪を黙認できるクソ野郎である。

ぶつちやけ他者とかどうでも良い。

万事が万事、定められた通りになるようなさ主義者だ。

誰が好き好んで面倒な問題を背負っているだろう幸薄少女に絡みたいと思うのか。

「取りあえず、どつかで寝かせるか」

とはいえ、やってしまったからには仕方が無い。

倒れた少女を放置してきたのは山々だが、それはそれで面倒ごとに引つかかりそうだし、彼女をこうして支えたままでも変質者か変態だ。

加えて、少女が起きたときの発言で居合わせた周囲が何を思うか。

疑わしきを叩きのめせ。

犯罪者に慈悲は無し、一生苦しめ。

それが現日本の国民性である以上、少女が起きたら最後、何の手も尽くしていない場合、俺はもれなく痴漢冤罪でも被せられるだろう。

そしたら、お先真つ暗。笑えない。

「さて、と……途中で起きませんように、余計な奴に見つかりませんように」と
意を決して、俺は名も知らぬ少女を背負う。

確か、デパートの屋上には人気の無い広場があつたはずだ。

そのベンチなら人の目も少ないし、何なら適当に膝枕でもしていれば有り触れた彼氏と彼女の甘々スキンシップにしか見えなくなる。

問題は道中、この少女を背負つたまま屋上へと向かうはめになっていることと、それが周囲からどのような目で見られるかということだが……。

「そこは運命の気まぐれを信じるしか無いな。頼むぜ我が天運……余計な運命は求めちゃいないから……」

具体的には変質者としての末路とか。

神のみぞ知る運命に祈りながら俺は少女を背負つて屋上を目指した――。